

## 2.九州派結成前後

「九州派展図録」の年表によると、1957年4月9日より14日まで、岩田屋社交室に於いて、石橋泰幸、桜井孝身展が開かれているが、その最終日に二人展会場で「若い画家の集い」が開かれている。

筆者はその二人展を見た覚えはあるが、14日の会合には出席していない。

二人展を見たきっかけは、当時、西日本新聞絵画部長原真人氏（漫画家）の甥に当たる友人が叔父さんから、新聞社にいる若い画家が二人展をやっているの、是非見に行ってくれと言われ、筆者に声を掛けてくれたので一緒に行ったのだった。

その「若い画家の集い」を拡大し、グループを結成するために桜井氏らが呼びかけたのが、五月初旬の喫茶店房屋での第1回会合であったと思う。筆者はどのような方法でその会合を知ったのか思い出せない。その時の出席者は20名位ではなかったかと思うが、さだかではない。申し合わせで、次回の会合には各自の近作を持ち寄ることになった。会の進行は桜井氏だった様であるが、グループ結成への気運の盛り上がり感が感ぜられた。

第2回の会合は、持ち寄った作品の互評会の様な形であった。筆者は、その年の1月に描いた「白い裸女」という6号の作品を持参した。画家達からの批評は忘れてしまったが同席した詩人の城尾徳昭氏が、東洋山水の趣があると評してくれたのを今も覚えている。

その会合で、翌月に迫っている、第8回西日本美術展に全員出品を決定したと思う。筆者は、その時の「白い裸女」を30号に引き伸ばして描き、別にもう一点50号に描いて「探女」A、Bとしたが、出品の際、裸女の上にサビツイタと冠してくれたのは、桜井氏である。

この時、桜井氏と筆者は、幸運にも奨励賞を受賞したのであった。その「サビツイタ女A」が、翌58年の石橋美術館主催の第1回西日本洋画新人秀作展で第一席となり、金賞を受賞したのである。

先に書いた、房屋に於ける2回に亘る会合の日にちの特定はできないが、筆者はこの時を以て、九州派の結成と考えている。同年8月14日より18日まで、岩田屋六階で開いた「グループQ十八人展」（Qは九州派の別称）を以て、本格的旗上げとする見方もあるであろう。